



## イラク、イラン：イラン軍機がイラクで「イスラーム国」を爆撃？

12月2日、アメリカ国防省は過去数日間イラン軍機がイラク東部で「イスラーム国」に対する爆撃を行ったと発表した。これについては、3日にベルギーで開催された「イスラーム国」対策についての国際会議の場で、ケリー国務長官がイランによる「イスラーム国」への攻撃は肯定的なものになるだろうと述べた。一方、イランの外務省は、3日に本件について（イラン軍機がイラクで「イスラーム国」を爆撃した）情報を確認しておらず、イラクに対する軍事援助や助言は国際法に沿って行っていると表明した。

### 評価

イラン政府は爆撃の事実について確認を避けたが、実際にイラン軍機がイラクで「イスラーム国」を爆撃したとしてもアメリカとイランの両国ともそれを両国の公式な連携による行動であるとは認めないであろう。その一方で、アメリカ、イランの双方と関係が深いイラク政府を結節点として、アメリカとイランが共通の敵である「イスラーム国」に対して足並みをそろえることは特段奇異なことではない。さらに、イラクはアメリカとシリアとの間の「イスラーム国」に関する諜報情報の交換でも役割を果たしている模様である。このように、「イスラーム国」対策においては、公式には敵対関係にあるアメリカとイラン・シリアの間でも非公式な連携や調整が行われていることを示す情報が増えつつある。

しかし、こうした連携が、「イスラーム国」対策や地域の安全保障の維持・管理での協力にイラン・シリアを公式に迎えることにつながる可能性は低いといわざるを得ない。例えば、サウジアラビアやトルコは「イスラーム国」に対する軍事行動をシリア紛争での自国の目標達成につなげることに固執し、地上軍による介入やシリア領内での「安全地帯」の設置を要求し続けている。「イスラーム国」対策やその後の地域の安定を実現する上で、イラン・シリアを秩序の担い手として取り込むことが必須ではあるが、この両国と著しく利害が異なる欧米諸国、サウジアラビア、トルコなどとの利害調整は容易ではない。当分の間、「イスラーム国」に対する対症療法としてアメリカなどとイラン・シリアとの非公式な連携は続くだろうが、地域の安定を実現できるような合意や協力枠組みの構築に至るまでには、克服すべき問題が非常に多い。

(高岡上席研究員)

©本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799